

# 忠臣蔵と、そして、連句と

## 二村文人

赤穂義士外伝の『土屋主税』や『松浦の太鼓』には、浪士の一人大高源吾が俳人として登場する。事実源吾は、芭蕉の高弟で蕉門十哲の一人宝井其角の門人で、子葉という俳号をもっていた。討入りの前日、それとなく別れを告げる源吾に、其角が「年の瀬や水の流れと人の身は」と詠みかけると、源吾はそれに「あした待たるその宝船」と応じる。

そんな忠臣蔵と俳諧の結びつきを格別意識したわけでもないが、昭和六十一年度は、一年生のゼミで『仮名手本忠臣蔵』を、二年生の国文講読では連句を取り上げた。以下はちよっと変わった国語教育の実践報告である。

\*

歌舞伎界では、いま急速に世代交代が進んでいる。そんな折に国立劇場で、人間国宝級の大幹部達を揃えて、三カ月にわたる『忠臣

蔵』の全段通し上演が企画された。これはまたとない機会なので、私は是非学生、それも将来母親になって次の世代を育てるであろう女子学生に見てもらいたいと思った。

歌舞伎と聞いただけで拒絶反応を示す人のほとんどが、生の舞台を見ていない。同じ否定するにしても、一度じっくり付き合ったらえで、それで馴染めないのならば、これはしかたがない。しかし、高校生の鑑賞教室などに同席して、大半の生徒が喋るか居眠りするかしている場面をしばしば経験している私は、強引に劇場へ連れて行くだけでは、かえって学生にとって不幸な出会いになるのではないかという心配があった。

そこで、芝居の方は十月から始まるので、それまではひたすら原作を読むことにした。しかし、学生の顔には明らかに失望と不満の

色が浮かんでいた。変体仮名の手引書を頼りの影印本テキストの講読や、休日返上の観劇は、王朝文学や現代詩に憧れていたであろう学生の期待を大きく裏切ったはずだ。わざと活字本の所在を伏せ、無理を承知で変体仮名を読み（と言っても実際は、学生は容易に活字本を探し出し、私の判読出来ないところまですら読み解いてくれたが）、合間に歌舞伎入門の話などをしていっていると、大序も終わらないうちに、十月を迎えてしまった。前の晩はよく寝て、長丁場に耐えられるようぐれも念を押して、当日を期した。

ところが、芝居がハネて感想を求めると、思いのほか評判が良い。滑稽な口上人形に続く大序の荘重な雰囲気、四段目・判官切腹の場の緊張感、人物では勘三郎の勤める高師直が面白かったという。人を映画や芝居に誘う

と、その人が退屈してはいはしまいかと気疲れするものだが、それと同じ気分を味わっていた私は、正直ほっとした。どうやら学生に幸運な出会いを提供出来たようだ。

三カ月を通じて、私には仁左衛門の由良之助や梅幸のおかるが珍しく、代役羽左衛門の平右衛門も収獲だったものの、全体にサラサラした淡泊な印象が残った（それだけ役者の一人一人に芝居が身につけており、肩の力が抜けていたのかも知れない）。学生は六段目の勘平切腹や、九段目の山科閑居はややもて余し気味だったらしい。しかし、本当に面白いものほど、その面白さがわかるまでには時間のかかるものだ。

学生の感想に、自分が読んだ義太夫の詞章を聞いていて理解出来るのが嬉しかったというのがあった。丁度英語を習い始めた頃、洋画を見ていて知った単語があると無性に嬉しかったのに似ている。西洋音階で育った私達にとって、邦楽は確かにとっつきにくい。好きな者にとっては、理屈抜きに楽しい世界でも、それを紹介するには、慎重なアプローチが必要であろう。逆に言うと、その手順さえ踏めば、多くの人達に未知の世界の魅力を伝えることも出来るのだ。

\* 国文講読では、小人数であるのを幸いに、連句の鑑賞と実作を試みた。連句は一人が五七五の句を詠むと、そこに別の連衆が七七の句を付け、それを三十六句、或いは五十句・百句と続けていくものである。隣り合った二句である世界が構想されるが、それ以外は互いに関連がなく、従って一貫したストーリーや、全体を統一するテーマはない。

教室では、『奥の細道』の旅で、芭蕉が土地の俳人達と巻いた作品や、石川淳・安東次男・丸谷才一・大岡信といった現代作家のものを鑑賞する一方で、歳時記片手の実作に励んだ。今日では三十六句で完結する歌仙が一般的で、当初私達もこの形式によったが、一コマの枠では『忠臣蔵』御同様なかなかはかどらず、ほとんど前期いっばいかかってしまった。そこで夏休み明けからは、最近考案された二十韻を試みることにした。次にその一部を紹介する。

朝もやに木犀香る小道かな  
露に湿りし銀の自転車  
房子  
理留  
月明り帰る子供の手を振りて  
待ちくたびれて欠伸ば止まらず  
みどり

スカートのほつれそのまま面接へ 真理

カウンターの客目つき意味あり 文人

手を取らせその場限りの恋ゲーム 真理

（「乙女胸に想ふ」の巻より、61・11・18満尾）

髪結びて紅さしはしゃぐ七五三祝 真理

冷気吸ひ込む透きとほる朝 陽子

バスの往き歸道に長く影伸びて 丹花

口笛を吹くほろ酔ひの客 文人

芋殻焚く煙くゆりて宵の月 弘美

（「七五三祝」の巻より、62・1・13満尾）

連句は俳句以上に規則がやかましく、それが連句人口を増やすことの障害にもなっているのだが、ゲームは規則が厳しければ厳しいほど高度に洗練され、面白くなるものである。作者がすぐ次には享受者になるという共同制作の文学は、恐らく世界に唯一のものであろう。

かつて本学では、故中村俊定先生が連句の実作をなさったと聞いているが、私達が未熟ながらもその衣鉢を継ぐことになるはずれば、この伝統の灯を大切に守っていききたいものである。